

□長岡市による四川大地震に対する支援

新潟県 長岡市長 森 民 夫

5月12日、ニュース速報で四川大地震の被害を目の当たりにし、3年半前の中越地震の際の混乱した状況を思い出した。当時、発生直後に被害の全貌を的確に把握することが極めて困難であったことが、今も強い記憶として残っている。

長岡市の隣の山古志村の悲惨な状況が正確に私に伝わったのは、地震発生から丸一日経過した翌日の夕刻であった。それまでは自分の市の状況の把握に追われ、他地域のことを思いやる余裕はなかった。もちろん、被災地全体の状況を知るすべもなかった。

数日が経過し、国土地理院が航空写真を基に作成した被害地図を見た瞬間に、中越地震が「地盤災害」であることを初めて自覚した。災害の渦中にいる者にとって、被災地全域にわたる状況を把握することは、極めて困難なのである。

まして、今回の四川省における被害は日本人の想像を絶するほど広域に広がっていた。山古志のような被災地が数百もあるような感じで、日本の常識で四川大地震を解釈することができないことは明らかであった。

## 1. 北京セミナーと被災地視察

## ○震災後初の日中公式復興セミナーへの参加

7月1日、北京で震災後初となる日中共同の公式復興セミナーが、中国の住宅・都市農村建設部と国際協力機構(JICA)の共催で開催され、被災経験のある市長として招聴を受けて基調講演を行った。

講演では、中越地震の経験を踏まえ、仮設住宅の入居・運営は、コミュニティの維持を大切にすべきこと。第二に、復興にあたっては、行政は被災者の自助努力を引き出す政策に取り組むことが肝要であること、またその際は自助、共助、公助の調和が大切であること。第三に、行政が安価で耐震性や景観・環境などに配慮したモデル住宅を開発し、住民や建設業者に示すことが有効であ



北京の復興セミナーでの基調講演

ることなどを説明。中国住宅・都市農村建設部の李兵弟局長、四川省建設庁の李又副庁長を初めとする中国側の約 200 人の参加者の関心も高く、復興の参考にしようという強い意欲と、日本の支援に対する中国側の期待が感じられた。

### ○現地視察と復興支援

北京でのセミナーの後、四川省の被災地視察を行った。都江堰市や徳陽市、綿竹市などの都市部の建築物の被災状況を見ると、新しい建築物の被害はかなり少なく、古い建物の被害が極めて多い傾向にあるように見えた。

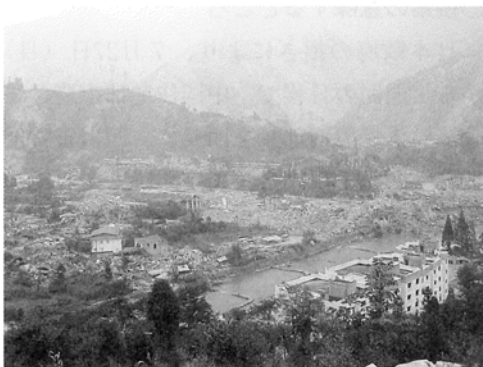
一方、レンガ構造が主体の農村部の住宅については、軒並み被害を受けているとい

う印象を受けた。

またこの時、視察時に四川省政府で面談した波川県(ぶんせんけん)幹部のアドバイスに従い、長岡市と山古志地域住民から預かってきた義援金(30 万円ずつ計 60 万円)を波川県雁門郷のチャン族の村「羅卜寨(らぼくさい)」の復興のために寄付することとした。

羅卜寨は、チャン族の風俗を色濃く残す人口 1,000 人余りの小さい村である。山古志地域にも似通った風景を生かし、観光に力を入れてきた様子は、村のホームページ [http://www.luobuzhai.com/inde\)c.asp](http://www.luobuzhai.com/inde)c.asp) で見ることができる。いわば、長岡市が羅卜寨村の復興支援パートナーになったようなものである。今後、住民同士の交流につなげたいという中国側の提案もあり、災害が落ち着いた段階で訪れたいと考えている。

なお、長岡市はこの後、7月14日と15日に国連が主催したセミナーにも参加。震災からの復興経験を、被災自治体の幹部約300人に講演することとなった。またこの際、山古志観光公社が、チャリティー闘牛大会で募った義援金50万円を、波川県映秀鎮の老街村に寄付することにし、仲介役を担って



被害を受けた汶川県映秀鎮市街地



九龍鎮 集められた被災住宅の瓦礫



羅卜寨の被害の様子(村のHPから)



汶川県の張企画建設局長に蘿卜寨村への  
義援金を届けてもらうことにした

くれる清華大学の顧林生・都市計画設計研究  
院公共安全研究所長に手渡した。

新たに老街村の支援を行うことにしたのは、  
老街村が震源地に近い中山間地で、山古  
志と同様に大きな被害を受けた地域だから  
である。結果として長岡市は、蘿卜寨村と老  
街村という 2 つの村の支援パートナーとな  
った。

今後は、国・県や国際協力機構の力を借り  
ながら、復興のための技術研修者の受け入  
れや、住民交流などを通して、2 つの村の復  
興を支援していきたい。

### ○被災地四川省で支援ニーズを把握

中越地震で経験したことであるが、全国  
あるいは全世界からの支援は、物質的な支  
援はもちろん、被災者を元気づけるという  
精神的な意味でも大変大きな力をいただ  
いた。災害時に世界中から支援を受けた長岡  
市としてはこの時のご恩返しという意味も  
あり、四川大地震の被災者に対して、出来  
るだけ支援をしていく方針である。

その際、支援の内容はあくまで支援され  
る側の希望に沿うことが大切であると思  
える。特に、支援先が海外である場合、災  
害の状況や国情が異なるため、被災地  
域のニーズの把握が大切である。

今回、私は四川省政府の希望を聞くこと  
に徹した。その結果、次の事項について確  
実なニーズがあると判明した。

第一に、安全、かつ、安価な農村住宅モ  
デルの策定とその普及、第二に被害を受け  
た建物の再利用が可能かどうかの安全度調  
査、第三に、大量に発生した廃材のリサイ  
クル対策、第四に、土砂崩れ箇所  
の復旧と安全対策についてである。これら  
については、中越地震で被災経験のある  
長岡市としても十分役に立てると考  
える。

## 2. 四川省政府関係者の山古志地域視察

### ○視察の意味するところ

日本政府の招きにより、7月27日(日)か  
ら1週間の日程で、中国住宅都市農村建設  
部の仇保興副部長を団長に、四川省幹部  
教育学会の王川副会長を副団長とする中  
国四川省震災復興日本視察団44名が日本  
からの復興を参考とするため来日した。

成都市、徳陽市の副市長や波川県の県  
長などそのメンバーの大半が、被災地の最  
前線で復旧・復興の陣頭指揮を執っている  
責任者であった。



四川省政府高官と意見交換しながら、現地  
で何が必要とされているかを聞いた

実は、この視察は、日本政府から中国政府への積極的なアプローチがあり実現したものと聞いており、特に、来日二日目の夜、私も出席させていただいた都内のホテルでの視察団を激励する会には、森喜朗元総理、経団連の御手洗会長をはじめ多くの国会議員、政府関係者、マスコミの出席のもと、政府、経済界が一丸となって復旧・復興の支援を行うというメッセージを中国側に示していたことから、日本政府のこの

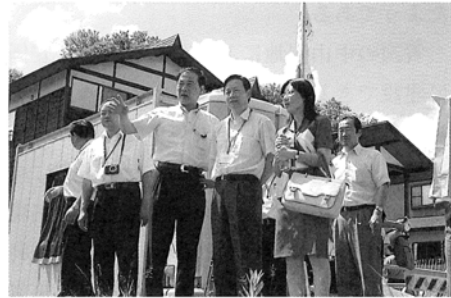
課題への力の入れようを伺い知ることができる。

### ○長岡視察の概要と視察団の反応

視察団は、関係大臣等の表敬や、国の防災センター、神戸の視察など、移動も含めてかなりタイトなスケジュールであったが、中国と同じ中山間地の被災地である長岡市の視察には、丸々一日を割いていただいた。

中国からの44名に、在京大使館員、中国国際人材交流協会日本国駐在事務所総代表が加わった視察団に対し、私は、中越地震で全住民が地域外での避難生活を余儀なくされた山古志が、わずか3年半で地震前の場所で以前と同じように生活をしている姿を直接、つぶさに見てもらうことが、復旧・復興へと立ち向かう彼らへの参考事例になるものと考えた。

土砂崩れの危険があるため、全世帯が集団移転することになった檜木集落の移転先については、特に視察団の関心が強かった。自分たちのかつての集落を眼下に見下ろすことができる山地に「天空の郷」という住宅地を造成し、中山間地型モデル住宅をベースに木造の被災者向け公営住宅などを建設



7.30 中国視察団来岡時に、天空の郷の概況を説明

した場所である。

視察団員は、そこの住人に、住宅再建のための日本政府や自治体からの支援の状況、自己資金確保のための金融機関からの融資やそれに対する公的支援の活用状況を熱心に質問していた。

山間地域での集落の再生や家屋の自力再建が大きな課題となっている視察団からは、復興した地域に立ち、そこで生活している住民の声を直接聞くことができ、今後の復旧・復興支援策の検討に大いに参考になったとの感想を聞いた。

また、国の重要無形文化財になっている山古志の闘牛の見学も視察コースに加えた。これは、ただ単に道路や土砂崩落箇所の復旧や宅地の造成などハード面での復旧のみならず、これまで地域が育み、そこでの生活の一部となっている伝統文化の復活も、住民生活には不可欠であることを見ていただくためのものであった。

「家族の一員である闘牛の牛が、自分達を山古志に戻らせてくれた」と語った勢子の言葉を、視察団全員が重く受け止めていたようである。

雪国の中山間地にふさわしく、また安価

に建設できる復興モデル住宅のデザインを被災者に示すなど、行政が必要とされる支援を適時、適切に行いながら、山古志に戻るといった住民の希望をつなぎ、それを実現してきた長岡の姿は、これから復旧・復興の本番を迎える視察団に多くの希望と勇気を与えてくれたとのお言葉をいただいた。

### 3. 成都市での復旧再建責任者研修会への専門家派遣

#### ○研修会の概要

中国政府から私に対し、四川省政府が9月4日から7日まで成都市で開催する研修会での講演依頼があった。市政の日程から私自身の出席が困難であったため、防災の専門家で、中越大震災からの復旧・復興に専門家の立場でご尽力いただいている、長岡造形大学の平井邦彦教授から私の特使として訪問していただいた。

9月5日に四川省党幹部育成学校で講演をされた先生からは、その後の四川省建設庁役員との会談や震源地の波川県の視察を含め、以下のとおりご報告を受けている。この研修会は、四川省の139の地域の自治体の復興リーダーを対象としたもので、朝9



9.5 四川省党幹部育成学校での講演風景

時から2時間半にわたり約300人の参加者が熱心に講演を聞き、質問をされた。

質問は、中越大震災で被害を受けた住宅の再建場所の選定や商工業振興、観光資源の復興策、さらには、被災した中山間地の過疎化の解消策などであり、住宅や住宅地、農地の復旧と合わせて、復興についても既に視野に入れた対策の検討が同時進行していることを実感した。

また、その日の午後に行われた、四川省建設庁役員との会談では、中国農村部は、農民が自ら家を建設しているため、日本の民家の耐震基準やその徹底をどのようにしているかという住宅の問題から、被害を受けた貧しい地域の再建については、少々経費がかかっても同じ場所とすべきか、技術やコストを検討し、他地域への移住とすべきかといった復旧・復興の基本的な問題にまで及んだ。

翌日の震源地である波川県映秀鎮の視察では、まち全体が崩壊した家やビルで埋めつくされ、壊滅的な被害状況を目の当たりにした。森林の少ない中国では、農家は木材をほとんど使用できないため、地元の材料のレンガとセメントで家を造ることが一般的であり、このことから建設庁役員の耐震についての課題の深刻さを実感したそうである。

一方、農村部では、一般的なこととして、政府が支給した材料で被災者が自ら汗を流し、仮設住宅を建設している。村民が配給された砂利をスコップで路面に敷いている様子や、子供たちが仮設住宅の周りでお母さんと元気よく遊んでいる姿、また、被災地を案内した波川県の彦敏県長からの、復興し



9.6 仮設住宅敷地に砂利を撒く住民

ていく姿をぜひまた視察いただきたいとの言葉に、災害に負けずに頑張る中国被災者のたくましさや意気込みを感じたそうである。

#### ○今後の支援の方向性

平井教授からの報告などから、レンガやセメントで造られる農家の耐震性の確保など、専門性の高いものは建築や防災の専門家に委ねるとして、同じ中山間地の被災地である長岡が当面行える支援としては、長岡の被災住民が中国被災地を訪れ、直接励ましの言葉をかけたり、生業や地域社会復興の実際について意見交換を行ったりすることではないだろうか。また、可能であれば、中国側の被災者が山古志を訪れ、自分達の将来の復興した姿を山古志の姿から思い描き、さらに希望を持って復興に取り組んでもらうなど、地域と地域との交流が両国被災地住民の復旧・復興の支援に繋がるものと考ええる。